

〈論 文〉

日本語の複合動詞「～出す」と英語の句動詞 V+out の対照研究

ニューベリーペイトン・ローレンス†
(東京外国語大学大学院総合国際学研究科)

A Contrastive Study of V1+*dasu* Compound Verbs in Japanese and V+out Phrasal Verbs in English

Laurence NEWBERRY-PAYTON
(Graduate School of Global Studies, Tokyo University of Foreign Studies)

キーワード：複合動詞、句動詞、語彙的アスペクト、意味拡張、空間前置詞

Keywords: compound verb, phrasal verb, lexical aspect, meaning extension, spatial preposition

要旨：本稿では複合動詞「～出す」と英語の句動詞 V+out を対照させる。「～出す」と V+out は両方とも「外部への移動」が中心的な意味であるが、「開始」（「～出す」のみ）や「消失」「形状変化」（V+out のみ）など、両者における意味拡張には相違が見られる。コーパスの調査及び翻訳タスク・容認度判断タスクを用いて、英語を母語とする日本語学習者にとって「～出す」の習得が困難であることを実証する。その上で、「～出す」の意味を「出現」と考えることで「～出す」と V+out の相違点が説明できることを主張する。

Abstract: This paper contrasts V1+*dasu* compound verbs in Japanese and V+out phrasal verbs in English. These forms share a core meaning of “external movement” but analysis reveals differing paths of meaning extension. Corpus and experimental data reveal the difficulty of acquisition of V1+*dasu* for L1 English learners of Japanese. The paper argues that the presence or absence of categories including “inception”, “disappearance” and “change of shape” can be explained if V1+*dasu* is regarded as expressing “appearance”.

原稿受理日 (2019-10-01)

査読後掲載決定日 (2020-01-09)

日本研究教育年報. 2020, Vol. 24, pp. 20-36. ISSN 2433-8923



† 本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンス (CC BY) 下に提供します。 <https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

1. はじめに

本稿では「出す」を後項動詞とする複合動詞（以下、「～出す」）と「動詞＋不変化詞 out」で構成される句動詞（以下、V+out）との対照を行い、共通する意味と共通しない意味を明らかにする。分析にあたって、学習者コーパス及びアンケート調査を用いて、英語を母語とする日本語の学習者がどの程度「～出す」の意味を習得しているかを実証し、学習者の産出の傾向や特徴をいくつか提示する。今後、この成果を利用して学習者の母語に基づく複合動詞の教授法の開発に結び付けたい。

本稿は以下のように構成されている。2 節では「～出す」の使用・習得について述べ、問題提起をする。3 節では「～出す」に関する主要な研究をふまえて、4 節では本稿の立場を述べる。5 節では「～出す」と V+out の対応関係を確認する。6 節では「～出す」で表現できない V+out の用法を概観し、本稿の枠組みでその非対応関係について考える。7 節では学習者の理解度を測った調査の結果を分析する。8 節では本稿の主な結論をまとめ、今後の課題について述べる。

2. 第 1・第 2 言語における「～出す」の使用・習得の現状

「～出す」は日本語の複合動詞のなかでも生産性が高い。「開始」を表す「～出す」は統合的複合動詞とされ（姫野 2018）、多数の前項動詞と組み合わせる。また、「複合動詞レキシコン」ⁱ⁾には語彙的複合動詞が 2700 件登録されているが、「出す」を後項動詞とする複合動詞は 132 件あり、「～込む」（255 件）と「～上げる」（133 件）に続いて 3 位を占めている。以上のことから、「～出す」は日本語教育において注目に値する項目であるといえる。

一方、英語を母語とする学習者による産出を見ると、「～出す」の非用が顕著である。「多言語母語の日本語学習者横断コーパス (I-JAS)」ⁱⁱ⁾の調査で、英語母語話者による「～出す」の使用は 2 件（「思い出す」1 件、「飛び出す」1 件）にとどまり、他の非母語話者と比べても際立って低い（表 1 を参照）。以下、英語母語または英語が堪能な学習者及び英語を媒介語として日本語を勉強する学習者の総称として、「学習者」と呼ぶ。

姫野（2018：87）によれば、「出す」は本動詞としても複合動詞の後項動詞としても、第一義的には「外部への移動」を表す。英語にも、「外部への移動」を表す不変化詞 out が存在するため、out を含む句動詞ⁱⁱⁱ⁾（V+out）と「～出す」は概ね対応し、母語からの転移が容易に生じると予測される。ところが、上述したとおり、学習者は実際に「～出す」をほとんど使用していないのが現状である。また、7 節で述べるように、「～出す」の使用制限や V+out との関係について、学習者の理解が不完全であることが調査結果で判明した。このように、「～出す」は産出においても理解においても難易度の高い学習項目であると考えられる。したがって、本稿では「～出す」と V+out の類似点と相違点を整理し、学習者も容易に理解できる「～出す」の教授法の重要性を示す。

表 1 IJAS における「～出す」の出現頻度（学習者 50 名あたり）

順位	母語	出現頻度	順位	母語	出現頻度
1	日本語	10	9	タイ語	3
2	スペイン語・ドイツ語・ ベトナム語・韓国語	6	10	インドネシア語・ 英語	2
6	中国語・中国語（台湾）	5	12	トルコ語・ ハンガリー語	1
8	ロシア語	4	14	フランス語	0

3. 「～出す」の意味と用法の分類

本節では前節で述べた問題提起に対して、先行研究にみられる「～出す」の特徴づけや分類を概観する。姫野（2018）は「～出す」の用法を表 2 のように 3 つに分けている。「移動」と「顕在化」をまとめる研究者もいる（陳 2013 など）が、両者を区別することが日本語と英語の対照において有意義であるため、本稿では姫野（同上）の分類を踏襲する^{iv}。

表 2 姫野（2018：88f）による「～出す」の意味分類（実例は前項動詞のみを表示）

a. 移動	①外部、全面、 表面への移動	(ア) 方法 「～すること によって出す」	押し、踏み、流し、溶かし等
		(イ) 状態 「～した状態で出す」	つまみ、はみ、持ち、積み等
		(ウ) 目的 「～することすなわち外 界に出す」(開放、外部利用 等)	救い、盗み、貸し、売り等
		分析不可	乗り、差し
	②表だった場への登場		召し、突き、駆り、狩り
b. 顕在化	①顕現		削り、照らし、書き、言い等
	②創出		作り、考え、編み、描き等
	③発見		見、探し、聞き、嗅ぎ等
c. 開始			降り、泣き、歌い、使い等

本節の残りでは「開始」の用法を中心に考察する。「～出す」の「開始」の意味について、姫野（2018）は「～始める」と比較して（1）で示す相違点を指摘している。

- (1) 「～出す」と「～始める」の相違点（姫野 2018 : 98ff を要約）：
- a) 感情・音の自然発生・自然現象・現実化の直前の様相を表す場合、「～出す」の方が適している。
 - b) 不測性・即興性が強調される場合「～出す」の方が適している。
 - c) 意志的表現の場合、「～始める」の方が適している。
 - d) 形態上の制限から前項動詞に「出す」または「始める」が来る場合、同音反復を避ける。

姫野（2018）の特徴づけや、不測性・即興性を「～出す」の語彙概念構造内に記述する陳（2013）の主張が強すぎるとして、日高（2018 : 60）は下記の例を挙げている。(2) と (3) では「ようやく」や「ゆっくりと」など「不測性・即興性」とは相いれない副詞が容認可能である。「不測性」や「即興性」は「～出す」の語彙的意味に含意されるものではない、ということになる。

- (2) 息子には以前から勉強するように言っていたが、試験二日前になってようやく勉強し出した。^v
- (3) 蒸気機関車がゆっくりと走り出した。 (日高 2018:60)

また、開始点が分かりにくい場合には容認度が落ちると述べている（日高 2018 : 60、容認度の判断は日高に従う）。(4a) では、飛行機が離陸する瞬間が捉えにくい。(4b) では複数の葉が落ちる事態が始まったという基準が不明である。(4c) では「気分が悪い」という状態が「客観的」^{vi}に測定可能なものではない。

- (4) a. ?*飛行機が飛び出した。
 b. ?*街路樹の葉が落ち出した。
 c. ?*山道のドライブで気分が悪くなり出した。 (日高 2018:60)

上記を考慮して日高（2018 : 59）は「～出す」を（5）のように特徴づけている。

- (5) 「～出す」の特徴：
- a. 運動が開始した瞬間の局面を表す。
 - b. それまで存在しなかった新たな状態が起こったことを表す。
 - c. その運動が継続して行われるかは含意しない。 (日高 2018:59)

池谷（2017 : 57）は（5b）と同様の見解を示し、「～出す」は「A【何もない状態】→B【動作が完成した状態】の状態変化を表している」としている（今井（1993 : 6）の「生起」、

山崎 (1995 : 9) の「出現、発生」も参照)。次節で詳述するように、本稿はこれらの考えを受け継ぐが、池谷 (同上) がいう「B」、日高がいう「新たな状態」への推移に注目し、「開始」に限らず「～出す」の基本的な意味を「出現」とであると仮定する。

4. 本稿の提案 : 「～出す」は「出現」を表す

前節で取り上げた先行研究では主として「～始める」との対照において「状態変化」や「出現」といった用語が用いられるものであった。繰り返しになるが、本稿では日高 (2018) のいう「新たな状態」への推移に注目して「出現」という用語を用いながら、「出現」という概念が「開始」のみならず、「～出す」の用法を全て包含する上位概念であると仮定する。すなわち、「移動」、「顕在化」及び「開始」は「出現」の3つの側面として捉えられる。どの解釈が優位かは前項動詞 (以下、V1 と呼ぶ) の意味次第であり、状況によっては複数の解釈が可能である。「飛び出す」は「移動」としても「開始」としても解釈されうるし、「書き出す」なら「顕在化」の解釈も、「開始」の解釈も可能である。このような多義性は「～出す」に基本的な「出現」の意味があると考えれば自然な説明がつく。

「出現」という概念の基で「～出す」の用法をみなおすと、(6) のように整理できる。「移動」の場合、V1 で表現される動作が「出現」の要因である。「飛び出す」なら、「飛ぶことによって出る」という具合である (「～出す」と V1 の自他の関係については松本 (2009) を参照)。「顕在化」には「作り出す」などの生産動詞と、「考え出す」のように心理活動を表す動詞とがあるが、いずれの場合でも、何らかの結果物・想像物が生じる。「移動」と「顕在化」は、出現するものが事態の一部である参与者であるという点で共通している。

(6) 「～出す」が表す「出現」の意味 :

- a. 「移動」 : 事態の参与者が外へ「出現」する
- b. 「顕在化」 : 事態の参与者が知覚できるように「出現」する
- c. 「開始」 : (新) 事態全体が「出現」する

「開始」の用法では出現するのは個体ではなく、新しい事態そのものである。例えば、「泣き出す」は「泣いて、(涙を) 出す」という意味ではなく、「泣いていない事態から泣いている事態へ推移」することを表す。日本語と他言語を比較しても、「開始」が「～出す」の最も特殊な用法といえる。「移動」及び「顕在化」に対しては「出す」と同様に「外への移動」を表す語句 (中国語 : 「V1+出/出去/出来」、韓国語 : 「V1+nayta」、ベトナム語 : 「V+ra」) が用いられるが、「開始」の意味ではそのような対応関係はみられず、「開始」を表すためには他の手段が必要である (小柳他 (2017) を参考)。英語においても、「移動」と「顕在化」と違って、V+out を用いて「開始」の意味を表すことは原則として不可能である。この相違点はどのように説明されるだろうか。

まず、「移動」と「顕在化」では、「出現」は V1 が表す動作によって引き起こされる結果

である（本稿では移動、すなわち位置変化を結果の一種であるとみなす）。「開始」は「結果」とは正反対の局面を表しているが、日本語では同じ形式「～出す」が使われるのである。

日本語と英語のこの相違点を視点の違いとして考えることができる。V1 が表す過程の起点に注目したのが「開始」の用法であり、同じ過程の着点に注目したのが「移動」または「顕在化」である。上述した多義性の例を用いて具体的に説明する。「書き出す」は「書く」過程の起点に視点をおけば「開始」の解釈となるが、「書く」過程の着点に視点をおけば結果物（文字など）に注目することになり、「顕在化」の解釈となる。アスペクト性を考えれば、前者は「始動相」に、後者は「結果相」に相当する。英語など、他言語では前後の文中の要素が時間・因果関係の流れに沿って意味を表すのが基本であり、「開始—結果」という双方向性はみられない。そのため、V+out は「～出す」と同様に「移動」から「開始」への意味拡張が生じていないと考えられる。例えば、write out は「書き出す」と形態的な共通性をもち、「顕在化」の意味を表現できるが、「書き始める」のような「開始」の意味は併せ持っていない。

本節では「～出す」が持つ「開始」の意味の特殊性について述べた。次節では実際の言語データを基に「移動」及び「顕在化」を表す「～出す」と V+out の対応関係を考察する。

5. 調査1：「～出す」と V+out の対応関係

本節では「移動」及び「顕在化」の「～出す」が V+out をはじめとする英語の語句にどのように対応しているかまたは対応していないかを考察する。代表性を得るために、「Web データに基づく複合動詞用例データベース」に出現する 147 の「～出す」のうち、姫野 (2018) で言及されている 101 の複合動詞を対象とした。表 3 で示すように、V+out に対応可能な「～出す」が多いが、特に「顕在化」においては単純動詞または in や up など他の不変化詞を用いた表現が対応している項目もある。

表 3 「～出す」と V+out の対応傾向（姫野の分類別）

姫野の分類	V+out	その他の不変化詞	単純動詞	全体
移動	61	0	8	69
顕在化	20	3 (in:1, up: 2)	9	32
全体	81	3 (in:1, up: 2)	17	101

対応しない項目には「移動」の「(ウ) 目的」と、「顕在化」のうち「①顕現」と「②創出」の例が多い（表 1 を参照）。「(ウ) 目的」タイプは「～することすなわち外界に出す」というように説明されるように、V1 と「～出す」の意味が重なっている。姫野 (2018: 87) が指摘しているように、これらの複合動詞には V2 をとっても全体の意味があまり変わらない例がある。「借り出す」などは V1 自体が物の一時的な所有権の授受に関する意味を持っている。V2 によって意味が大きく変わらないため、V2 が「余剰」といえるかもしれない（「余

剰」という用語は大谷（2009）による）。この類を英語の V+out で表現する場合、out の意味が既に動詞によってある程度表現されている。したがって、lend out などは重複の響きがあり、out を伴わない動詞がより自然である。以下の例では out の付与が容認されない。なお、sell out は「売り出す」ではなく「売り切る」という意味になるが、out のこの用法については次節で述べる。

- (7) S 社は新商品を売り出した。

S Ltd. has launched a new product.

- (8) 泥棒は店から宝石を盗み出した。

The thief stole the jewels from the store.

（複合動詞レキシコン）

次に「顕在化」の例について述べる（表 4 を参照されたい）。「顕在化」においては、「生む」や「作る」、「醸す」など V1 が本質的に生産動詞である場合、out は通常付加されない

(9) vii. それに対して、「書く」「削る」「刻む」などは本来動作動詞であり、out の付加によってはじめて「作成」を表す。これらはいわば派生的に生産動詞として用いられる。同様の動詞に「～出す」がついてはじめて結果物の出現を表すのと並行的な現象である。

- (9) 最新技術を応用して人々の生活に役立つ商品を作り出す。

Create products using the latest technology to improve people's lives.

『日本語複合動詞多言語翻訳の基礎資料』

- (10) 彼は、木のかたまりから仏像を削り出した。

He carved a Buddha statue out of a block of wood.

（複合動詞レキシコン）

「創出」には「編み出す」と「織り出す」のように、V1 が類似しているにもかかわらず out との対応に相違がある対もある。しかし、「編み出す」と work out の対応は、厳密に言えば「編む」と「出す」の組み合わせがそのまま英語でも成り立つわけではない（*weave out は容認度が低い）。「編み出す」が全体として意味する「思考する」に対して、「編む」とは全く別の動詞 work が out と組み合わせさせて同様の意味を表しているにすぎない。したがって、「編み出す」と work out の表面的な対応は上述した一般化にとって本質的な例外ではないと思われる。

本稿の調査の範囲内ではあるが、「発見」を表す動詞群はほぼ全て「V+out」で表現可能である、という顕著な傾向が明らかになった。例外は「見つけ出す」であったが、V+out の形式である find out は「知る」、「発見する」など類似した意味を持っている。全体としては「顕現」及び「創出」にみられるような制限はないといえる。

表 4 姫野 (2018) の「顕在化」に分類される「～出す」と対応する英語表現

タイプ	対応する例	対応する英語	対応しない例	対応する英語
顕現	暴き出す 言い出す 打ち出す 書き出す 削り出す さらけ出す 張り出す	let out come out with work out write out carve/cut out bring out stick out	炙り出す 思い出す 煎じ出す 炊き出す 照らし出す 煮出す	reveal, uncover remember, recall infuse, extract, brew distribute (food) light up, illuminate brew, boil down, extract
創出	編み出す 刻み出す ひねり出す	devise, invent, work out carve out work out, invent, devise	生み出す 描き出す 織り出す 稼ぎ出す 醸し出す 考え出す 作り出す	create, formulate, bear, depict, express, show weave gain, earn, win etc. cause, create, produce invent, think up manufacture, create
発見	洗い出す 嗅ぎ出す 聞き出す 捜し出す 探り出す 調べ出す 尋ね出す 割り出す	wash out sniff out find out dig out dig out dig out find/seek out work out	見つけ出す	find, discover

最後に、「～出す」に対して up や down など、out 以外の不変化詞に対応する例もいくつかあったが、紙幅の都合でこれ以上考察しない。

- (11) a. 「顕現」: 照らし出す light up, illuminate、煮出す brew, boil down, reduce, extract
b. 「創出」: 考え出す invent, come up with, think up

6. 「～出す」では表現できない out の用法

前節では V+out で表現できない「～出す」の用法を中心に考察したが、本節では「～出す」で表現できない V+out の用法を概観する。モーリ (2012)、Moehle (2016) は V+out が本動詞「出る」「出す」、複合動詞「～出す」及び漢字「出」を含む漢語などにどの程度対

応するかを考察し、「～出す」では表現できない out の a. reflexive (「再帰」)、b. change to inaccessibility (「消失」)、c. bamboozle (「欺瞞」) 用法があるとしている (「欺瞞」は本稿の筆者の訳語である)。

Moehle (同上: 129) によれば、これらの用法が「～出す」に対応しないのは out と「出る・出す」が持つ〈容器〉のスキーマの変更・拡張が英語と日本語とで異なるためである。本稿では、Moehle の論考を批判的に考察し、これらの用法が「出現」としては捉えがたいため成立しないことで説明されると考える。

まず、「再帰」用法を取り上げるが、用語の使用について、注意が必要である。Moehle が「再帰」と呼んでいる例は、より正確には形状変化を表しているといえる。(12) のような他動詞文の場合、形状が変化するのは動作主 They ではなく動作対象である。(12) に対応する自動詞文 (the rug spread out=広がった) を考えても、主語に立つ名詞が形状変化を被るが、動作主ではないため、正確には「再帰」表現ではない。

(12) They spread out a rug on the grass.^{viii}

彼らは草の上に敷物を広げた。(空間的な伸長)

(13) He made an effort to bulk out his paper's contents.

彼は論文の中身を膨らませるように努力した。(非空間的な伸長) (Moehle 2016:111)

(12) や (13) のような例における非対応について、Moehle (2016) は認知言語学の立場をとり、動詞「出す」と不変化詞 out がどのように認知されるかに違いがあるとしている。動詞は過程を表し、「連続スキヤニング (sequential scanning)」によって順番に認知されるのに対して、非時間的な意味を表す不変化詞は「一括スキヤニング (summary scanning)」によってひとまとまりとして認知されるが、同一物が二つの時点において別の様相をしている「再帰」的動きを捉えるためには一括スキヤニングが必要であるという。日本語において外部移動を表す要素が動詞であるため、再帰用法が容認されないのだと Moehle は述べている。最終的には、文においてどの範疇の要素が経路の意味を表すかという類型論的な相違点に至ると思われるが、日本語と英語だけを比べてもその仮説の妥当性は判断できない。また、Moehle の指摘に反して、「突き出す」など本来の再帰用法を持つ「～出す」が存在する。したがって、「～出す」で表現されないのは、「再帰」ではなく、「形状変化」であると考えられる。

本稿では、形状変化は「出現」の概念には当てはまらないため、「～出す」には out と同様の使用が容認されないと考える。(12) や (13) の動詞「広げる」「膨らませる」にみられるような動きは外部移動とは異なり「内・外」や「認知不可能・可能」といった境界線を越えず、新たな事態の「出現」には至らない。

次に、out が持つ「消失」の用法を挙げる。「消失」は「顕在化」と意味的な対をなしており、「顕在化」が「知覚可能になる」ことを表すとすれば、「消失」は「知覚不可能になる」

ことを表しているといえる。Moehle (同上 : 199f) は out の両義性を視点の違いによって説明できるとしている。視点が外部に置かれた場合、ものが〈容器〉から移動することによって、知覚できるようになる。一方、視点が〈容器〉の内部に置かれた場合、ものが〈容器〉から移動することはすなわち (内部からは) 知覚不可能になることを意味する。Moehle (同上 : 122f) によれば、この現象がなぜ生じるかは不明であるが、「出る・出す」と out にかかる視点の制限が異なる可能性があると言っている。

- (14) The writer kept grinding out more stories until the magazine agreed to accept three of the best ones. (接近可能⇨顕在化)

その作家はさらに続々と作品を作り出し、ついにその雑誌は最も優れた物の中から三作を掲載することに同意した。

- (15) Grind out your cigarette. (接近不可能⇨消失)

葉巻をもみ消してください。

(Moehle 2016:121)

「消失」が「出現」とは反対の意味を表すとすれば、「～出す」に「消失」の意味が表現できないのは当然のことともいえる。また、日本語より英語のほうが視点にかかる制限が緩いことについて、一言付け加える必要がある。周知のように日本語では、受動態の使用による視点の統一^{ix}、授受動詞及び直示的表現の卓越、形容詞や意志表現の人称制限など、広義の「視点」に関わる制限が多数観察される。一方、英語では「顕在化」と「消失」の例以外にも (16) で示すように、視点の変更に合わせて同一の事態を反義語で表現できる場合がある (大谷 2009 を参照)。日本語ほど視点の制限が強くないことが窺われる。

- (16) a. 車が速度を落とした。

The car slowed {up/down}.

- b. 家が完全に燃えてしまった。

The house burned {up/down}.

最後に、Moehle (2016:123ff) が「欺瞞 (bamboozle)」と呼んでいるタイプについて述べる。この名称は、所有者の意志にかかわらず所有が変わる例が多いため選ばれただろう。例えば、(17) では「彼女」、(18) では「貧乏人」からものが奪われることが表現されている。「欺瞞」の用法がなぜ out にあり「～出す」にないのかに関して、Moehle (2016 : 128) には明白な説明はないが、和文の下線部からわかるように、日本語では「～上げる」や「～とる」など、他の複合動詞を用いる場合があると指摘している。

- (17) He coaxed her out of her watch.

彼はうまくだまして彼女から時計を取り上げた。

(18) He ground money out of the poor.彼は貧乏人から金を搾り取った。

(Moehle 2016:124)

日本語で、「聞き出す」のように「欺瞞」タイプに通じる「～出す」の例がないとは断言できないが、V+out がこの用法でより生産的に用いられるのは確かである。いずれにしても、「欺瞞」の用法は「消失」の用法と同様に「出現」としては捉えがたい。授受というのは本質的に双方向の事態であり、所有者にしてみれば「消失」に近い意味を表しているため、「消失」と同様の理由で容認されないのではないかと思われる。いずれの場合でも、他の複合動詞（「～消す」、「～上げる」、「～取る」）が「～出す」を補って V+out と同範囲の意味が表現可能になっている。

本節では「～出す」にないと言われる V+out の 3 つの用法を考察し、その欠如が「～出す」が「出現」を表す帰結であると述べた。最後に、表 5 で「～出す」と V+out の（非）対応関係を示す。

表 5 「～出す」と V+out の（非）対応関係

用法	「～出す」	V+out
開始	○	×
移動	○	○
顕在化	○	○
消失	×	○
形状変化	×	○
欺瞞	×	○

7. 調査 2 : 「～出す」に対する学習者の理解度

本節では学習者がどの程度「～出す」の使用を理解しているかを明白にするために行った調査の結果を報告する。調査の対象はイギリスのリーズ大学に在学している日本語専攻 15 名であった。調査の構成はファム（2019）に準じた。ファム（2019）は、ベトナム語母語話者に対して調査を実施しているが、異なる母語の学習者の回答と比較できるように同一の形式を用いたのである。調査は複合動詞「～込む」、「～出す」「～上がる／上げる」の 3 項目を扱っているが、本稿では「～出す」に関する回答だけを考察する。調査は 3 部からできており、第 1 部では学習者が複合動詞をどの程度意識しているか、またどれほど難しいと感じているかとその理由を記述する項目があったが、本稿では第 2 部と第 3 部を主な分析の対象とする。

第 2 部は「～出す」を含む 11 の和文を英訳する課題である。各例文について「～出す」で表現される意味が（out の使用の有無にかかわらず）適切に訳出されたかどうかを、筆者が判断した。表 6 で例文と正解数を示す。

まず、「～出す」と V+out の対応の有無が正解数に全体的な影響を与えたとはいえない。何よりも V+out では表現できない「開始」の例はいずれも正解率が高かったからである。

「～出す」の「開始」の用法は英語にないものの、多くの前項動詞と組み合わせあって一定の意味を表す点においては理解しやすい項目という可能性がある（「開始」の「～出す」で困難なのは 2 節で言及した「～始める」との区別であろう）。正解数が最も低い項目は「移動」を表す例 c. と例 f. であった。「移動」は対応関係が最も対応しやすい類であるため、これは予想に反する結果となった。以下の分析で誤訳の要因について述べる。

表 6 第 2 部の英訳タスクで用いられた文

例文	分類	正解数
a. (私は) 車を運転していたら、路地から急に子どもが飛び出して来て、ぶつかりそうになった。	移動	13
b. 彼は、父と口論になって家を飛び出したが、行くところはなかった。	移動	14
c. 図書館の本を勝手に持ち出してはいけない。	移動	8
d. 彼はよく議論とは関係のない話を持ち出したので、みんなが嫌な顔をした。	移動 ^x	12
e. 横綱は相手を土俵の外へ一気に突き出した。	移動	11
f. 彼は自宅に侵入した男を捕まえて、近くの交番に突き出した。	移動	5
g. (私は) きのう会った人の名前を思い出せなかった。	顕在化	15
h. (私は) 最新技術を応用して人々の生活に役立つ商品を作り出したい。	顕在化	14
i. サッカー場で満員の観客の中から彼を探し出すのは難い。	顕在化	14
j. このシステムは危険だと、最初に言い出したのは彼だ。	開始	13
k. 【電車に乗っていて】まだドアが閉まっていないのに、動き出したので (私は) 驚いた。	開始	12

「持ち出す」を含める例 c. は正解数が 8 にとどまり、学習者の半数近くが例文を正しく翻訳できていない。「持ち出す」は合成性^{xi}が高く、V1 と V2 の足し算で全体の意味が引き出せる例である。英語でも、take out などのように V+out で表現可能である。ところが、V+out を用いた学習者は 3 名だけであった。他の学習者は副詞「勝手に」にひかれたためか「動かす」、「返却しないで家に置く」、「友達に貸す」といった回答をしている。学習者が「～出す」と V+out の対応関係をより意識していれば、正解にたどり着いた可能性が高いと思われる。

- (19) 例 c. : 図書館の本を勝手に持ち出してはいけない。

You can't just leave the building with library books. 誤訳例 (被験者 8)

It's forbidden to lend a library book to a friend. 誤訳例 (被験者 14)

いうまでもなく、半自動的に「～出す」を V+out に訳するという方法で文を正しく英訳できないこともあるが、学習者がそのような態度をとっているという証拠はみられない。例えば、「思い出す」を含めた例 g. では out を (誤って) 使用した学習者は 1 人もいなかった。「開始」の例も、V+out では表現できないが、上述したとおりほとんどの学習者が正解している。すなわち V+out を過剰に使用していないのである。

- (20) 例 g. : (私は) きのう会った人の名前を思い出せなかった。

I couldn't remember the name of the person I met yesterday. 正解例 (被験者 6)

第 2 部で正解数が最も低かったのは「突き出す」を用いた例 f. である。この例文を正しく訳した学習者は 5 名のみであった。V+out を用いた学習者は 4 名いたが、いずれも不正解の回答であった。最も自然な訳文は被験者 8 の回答のように out を含まない文である。

- (21) 例 18f. : 彼は自宅に侵入した男を捕まえて、近くの交番に突き出した。

He caught the man who broke into his house and turned him into to the nearest police station. 正解例 (被験者 8)

He caught the man who snuck into his home and threw him out at the 'kouban'? 誤訳例 (被験者 15)

He sent out the man who had trespassed his house to the nearest police station. 誤訳例 (被験者 6)

例 f. と同じ「突き出す」を用いた例 e. は学習者が 11 名も正解している。両者の違いは、例 e. が例 f. より合成性が高いことにあると思われる。例 f. の「突き出す」は、与格名詞「交番」が内部構造を持っているだけに、日本語でも文字通り「突いて、出す」と言い換えても事態を正しく表現できない。一方、例 e. では学習者が前項動詞「突く」に対して様々な訳語 (charge, expel, push, send, throw) を選択しているが、「外部移動」の働きかけとなる動作であることに変わりはないので、英訳がより容易にできたと思われる。

- (22) 例 17e. : 横綱は相手を土俵の外へ一気に突き出した。

The Yokozuna threw his opponent out of the ring. 正解例 (被験者 5)

以上の観察から、複合動詞の合成性によって、英訳の難易度が変わるが、学習者が「～出

す」と V+out の（非）対応関係をより意識するようになれば、新出語彙に対しても推測・理解できる可能性が高まることが示唆された。「～出す」と V+out の意味が最も接近していると思われる「移動」を表す例文の正解率が最も低かったことから、改善は十分可能であると考えられる。

第 3 部は「～出す」を含む 14 の文の容認度を判断するタスクである。適切な文に○を、不適切な文に×をつけることが「正解」とみなされる。姫野（2018）の分類に沿って「内部移動」（4）、「顕在化」（6）、「開始」（4）という構成である。予測に反して、「移動」、「顕在化」及び「開始」の全体的な正解率に大差はみられず、いずれも 6 割程度であった（移動：66.7%、顕在化：68.9%、開始：65%）。しかしながら、例 m.、例 q.、例 x.のように、各タイプには正解率が際立って低い（正解数が半数以下の）項目がある（表 7 を参照）。

表 7 調査第 3 部（文の容認度判断）

文と「正解」	分類	正解数
l. 警察が捜査に乗り出した。○	移動	11
m. 彼女はバスの窓から身を乗り出した。○	移動	6
n. 子供が自分で歯磨き粉をチューブから絞(しぼ)り出した。○	移動	12
o. 研究者はこの問題点を解決するために、アイデアを絞り出した。○	移動	11
p. 合格者の名前を黒板に書き出す。○	顕在化	9
q. この用紙のここにあなたの名前を書き出してください。×	顕在化	7
r. 彼は新商品のデザインを考え出した。○	顕在化	12
s. 考え出してから行動したほうがいい。×	顕在化	11
t. 彼女の本心を聞き出す。○	顕在化	13
u. 先生の説明を聞き出してから、課題を準備する。×	顕在化	10
v. 急に雨が降り出して、傘を持っていないので、帰れない。○	開始	13
w. 梅雨(つゆ)になると、毎日雨が降り出している。×	開始	9
x. 悲しいときは、がまんしないで泣き出そう。	開始	5
y. 何が起こったのか分からないが、彼女は道で泣き出した。○	開始	12

例 q. 及び例 x. は述語の特質によって容認されない例である（平叙文であれば同様の文脈でも容認される）。また、例 q. の場合「書き出す」に write out が形態的に対応しているため、学習者によってより容認されやすいと考えられる。例 m. の「乗り出す」そのものは学習者にとってなじみのない複合動詞であったため、文を容認しなかった可能性もある。

(23) 例 m. : 彼女はバスの窓から身を乗り出した。(○)

(24) 例 q. : この用紙のここにあなたの名前を書き出してください。(×)

(25) 例 x. : 悲しいときは、がまんしないで泣き出そう。(×)

本節ではアンケート調査の結果から、学習者が実際にどの「～出す」の用法が理解しにくいかが明らかになった。「開始」のように、学習者の母語にある形式が成り立つかどうかと、第2言語において習得が難しいかどうかは別の問題である、という重要な結果が得られた。データの規模はまだ小さいため、別の学習者向けに再度調査を実施する予定である。そうすることで、個人差を超えて、一般的にどの学習者でも習得しにくい「～出す」の正体が現れると期待される。

8. まとめと今後の課題

本稿では「～出す」と V+out を対照し、対応関係を明らかにした。「～出す」の意味を「出現」とみなすことによって、「開始」（「～出す」のみ）や、「形状変化」、「消失」、「欺瞞」（V+out のみ）といった、意味の範囲の差異を整理できることを示した。調査1ではこの考察に基づいて、（前項）動詞の特質を分析して、どのような（前項）動詞であれば V+out が容認されるかを示した。また、調査2では学習者が実際にどの程度「～出す」を理解しているかを考察し、学習者にとってとりわけ困難な「～出す」が何かについて示唆を得た。out には本稿で論じた用法以外に outbid、outlive などにみられる「超過」の用法（「～すぎる」に対応）や sit out、hold out などに見られる「継続」の用法（「～きる」に対応）もあるが、これらの用法に関しては稿を改めて論じたい。

本稿では「～出す」の具体的な教授法に関する提案はできなかった。「～出す」の用法を「～出現 (appearance)」で一括することが実際に効果的かどうかは今後の研究で実証しなければならない。また、調査2の規模を拡大し、より一般性のある結果を獲得する必要がある。最後に、ベトナム語など他の言語を母語とする学習者と比較し、どの言語でも習得が困難な項目と、特定の母語を持つ学習者にとってのみ習得が困難な項目を区別することによって、類型的な特徴を明らかにし、特定の学習者向けにその母語に基づく教授法の開発ができると思われる。

謝辞

本稿は、平成29年度から東京外国語大学国際日本研究センター国際日本語教育部門プロジェクト「多言語による複合動詞翻訳プロジェクト」の研究成果の一部である。本稿の第7節における日本語学習者による調査データはリーズ大学の武輪美香先生のご協力のもと、2019年度リーズ大学日本語学科の3・4年生の協力を得た。また、データは、科学研究費基盤B「国際連携・高大連携による双方向英語・中国語・日本語学習者コーパスの研究」（17H02357 望月圭子代表）の助成により、英国リーズ大学との協働で収集され、分析を行っている。また、東京外国語大学国際日本研究センター特任研究員小柳昇先生には、分析にあたり多方面からの支援をいただいた。この場を借りて感謝の意を表したい。

本稿の内容の一部は、東京外国語大学国際日本研究センター主催講演会「日本語における複合動詞：多言語との対照・オンライン教材の開発」（東京外国語大学 2019 年 3 月 16 日）の口頭発表の内容に基づくものである。

参考文献

- 陳劭憐 (2013). 「語彙的複合動詞と統語的複合動詞の連続性について—『～出す』を対象として」 影山太郎 (編) 『複合動詞研究の最先端—謎の解明に向けて』 47-74 ひつじ書房
- 陳奕廷・松本曜 (2018) 『日本語語彙的複合動詞の意味と体系：コンストラクション形態論とフレーム意味論』 ひつじ書房
- ファム ティタインタオ (2019) 『ベトナム語からみた日本語のアスペクト複合動詞』 東京外国語大学 修士論文
- 日高俊夫 (2018) 「複雑述語における命題と推意—開始を表す表現について—」 『日本言語学会第 156 回大会予稿集』 57-62
- 姫野昌子 (2018) 『複合動詞の構造と意味用法 新版』 研究社
- 池谷知子 (2017) 「開始を表す複合動詞「～出す」「～始める」の違い—コーパスを利用した使用実態から—」 神戸松蔭女子学院大学研究紀要言語科学研究所編 『トークス = Theoretical and applied linguistics at Kobe Shoin』 20: 35-59
- 今井忍 (1993) 「複合動詞の多義性に対する認知意味論によるアプローチ：“～出す”の起動の意味を中心に」 『言語学研究』 12 1-24
- Lindner, S. (1981) A lexico-semantic analysis of verb-particle constructions with up and out. University of California San Diego 博士論文
- 松本曜 (2009) 「複合動詞「～込む」「～去る」「～出す」と語彙的複合動詞のタイプ」 由本陽子・岸本秀樹 (編) 『語彙の意味と文法』 175-194 くろしお出版
- モーリ アシュリン (2012) 「out を含む英語の句動詞と「出る／出す」を後項とする日本語の複合動詞—意味的観点からみた対照的分析」 大阪大学大学院言語文化研究科日本語・日本文化専攻 『日本語・日本文化研究』 22 : 135-148
- Moehle, A (2016) A Contrastive Study of Japanese Compound Verbs and English Phrasal Verbs: Building Toward a Typology of Linguistic Construal Operations Involved in Processes of Semantic Extension. 大阪大学 博士論文
- 大谷直樹 (2009) 「不変化詞の主観的意味について：有界性と価値付与の観点から」 『認知言語学論考』 8: 191-226
- 小柳昇・ローレンス ニューベリー・ペイトン・クリコフ アガタ・ファム ティ タイン タオ・張正・劉倩卿・崔正熙 (2017) 『日本語複合動詞多言語翻訳の基礎資料』 東京外国語大学
- 山崎恵 (1995) 「開始の局面を取り立てる局面動詞について—『～始める』『～出す』の用法比較—」 『坂田雪子先生古希記念論文集 日本語と日本語教育』 87-103 三省堂

参考資料

国立国語研究所『複合動詞レキシコン』

<https://db4.ninjal.ac.jp/vvlexicon/db/>

国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』

<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>

国立国語研究所日本語教育研究・情報センター『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』

<https://chunagon.ninjal.ac.jp/static/ijas/about.html>

国立国語研究所『Web データに基づく複合動詞用例データベース』

<https://csd.ninjal.ac.jp/comp/>

i 「複合動詞レキシコン」は、現在の日本語でよく使われる動詞＋動詞型の複合動詞（2,700語以上）に意味的・文法的情報を付与し、日本語研究の専門家だけでなく、外国人日本語学習者を含む一般の利用者にも使っていただくことを意図したオンラインデータベースで、様々な検索方法が可能です。」

<https://db4.ninjal.ac.jp/vvlexicon/>より。

ii 「I-JAS は、「多言語母語の日本語学習者横断コーパス (International Corpus of Japanese as a Second Language) の略で、12 言語の異なる母語を持つ海外の日本語学習者、および国内の教室環境・自然環境の日本語学習者の発話データと作文データを横断的に収集し、収録したコーパスです。」

<https://chunagon.ninjal.ac.jp/static/ijas/about.html> より。

iii 本稿では句動詞を「動詞と不変変化詞 (Particle) の組み合わせ」であると定義する。

iv ただし、個別の動詞の分類について、不明な点がある。例えば、「書き出す」と「描き出す」はそれぞれ「顕現」と「創出」に分類されているが、これは日本語教育において有意義な区別であるかは議論の余地がある。

v 本稿では引用した例文を含め、筆者が全ての例文で「～出す」及び対応する英語に下線を引いている。点線は、対応表現が V+out でない（または「～出す」でない）表現である。

vi 日高 (2018) では「客観的」を「他者から観察可能」という意味で用いていると思われる。

vii 例外は、生産を表せる動詞が別の意味で用いられる場合がある (make out は容認されるが、その場合「見分ける」という意味を表す)。

viii 本節の英文及び和文は Moehle (2016) による。

ix 以下の例文の容認度の相違を参照。

i. 通勤のとき、{足を踏まれた／？誰かが私の足を踏んだ}。

ii. When I was on the way to work, {? my foot got stepped on/ someone stepped on my foot}.

和文のほうは、話し手の視点を維持するために＝従属節と主節の主語を統一するために受動態を用いるのがより自然であるとされているが、英文では主語を話し手以外の動作主に移したほうが自然である。

x 姫野 (2018) にしたがって、このような比喩的な用法を「移動」に分類する。

xi 陳・松本 (2018 : 126) は Langacker (1987) にしたがって、「合成性とは、全体の構造が、その部分の構造の組み合わせとみなすことができるかどうか」という性質であるとしている。